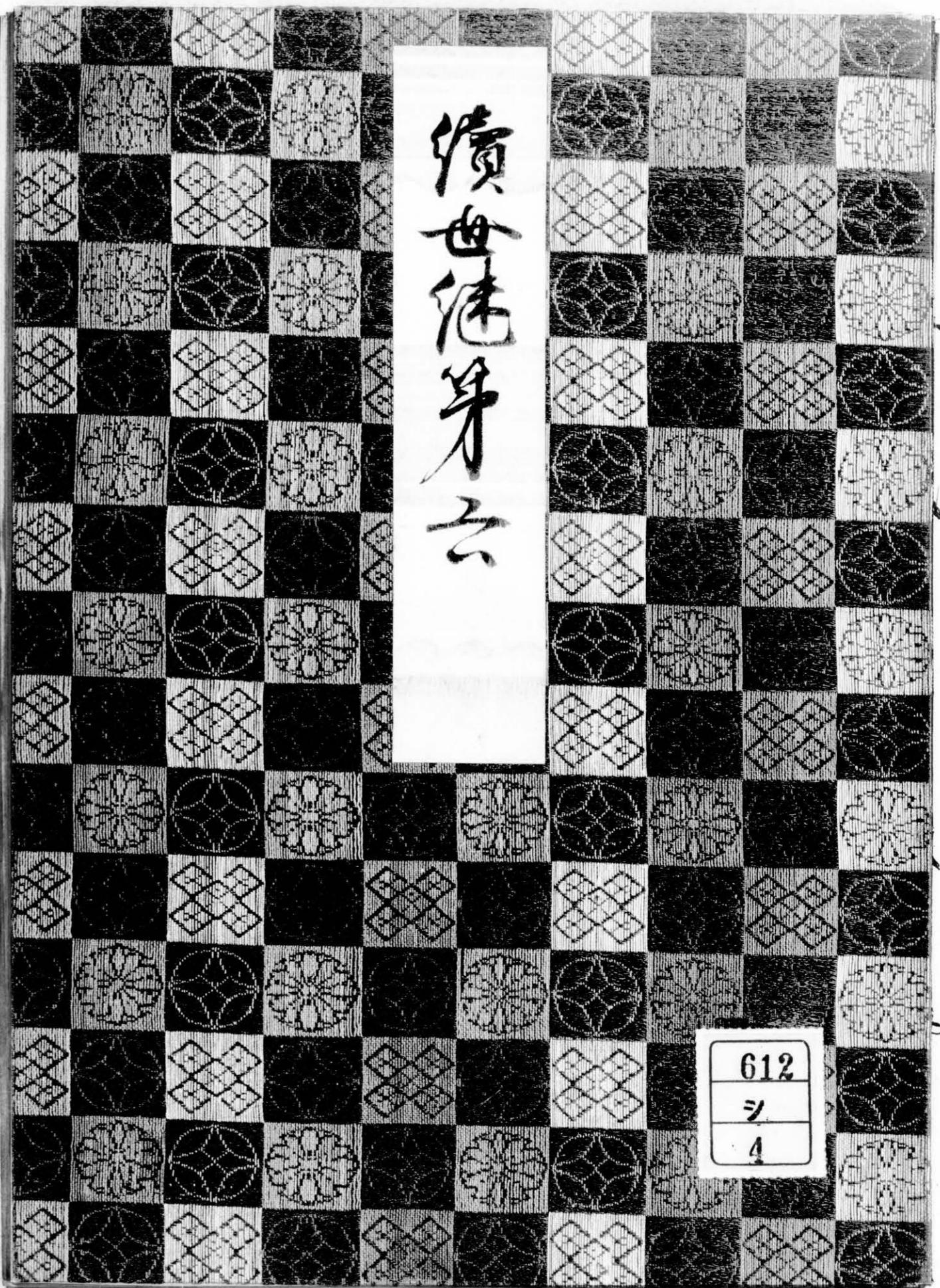


瀬世通年水

612  
シ  
4



10 | SEKISUI JUSHI | 20

150 cm

612  
シ  
4



續世継第六

ゆらぎの下第六

おひくせん

かく人へき

ゆきゆのやこ

ゆみのゆ

ゆきゆのゆ

ゆきゆのゆ

じうの本のゆ

花の面

毛本

毛文公集

あらわせ  
あつたがゆけもまえりくら  
あゆたまきるむりのまうでは  
あらわす川あたたかくとよひのあ  
たましを用ひてそうちねどさる  
いかでまんじらはりとてくら  
あらわすあまくまくとてくら  
あらわす御室の才二志御の小い  
あらわす御室の西宮の才高明志御

ゑひじとあんてらも永義二年八月一日  
内大臣にあつまつて御年八十マ大  
わゆとすまつてりあらそもひお康平  
之年不<sup>レ</sup>た大臣にあらそもひ  
セナニシヤキアシマ和琴志道モ  
ノノノノノトナリキアラモタハ裏  
之ムリヨウリハルハカハシ歎の森の  
一遇やアヤアゼ人命ハムト申伊  
ノヨリ人命えきはくと御集ヨ  
モモモモモモモモモモモモモモモ  
模

集う」とあるので此處に付けて  
口うし仰ふ御事ハ御ちと  
まくらす鳥うそ子はあこ  
えひじとあらそもひおのす  
人代をもととしゆりけうだり  
みくまうしとしゆりけうだり  
うしキテ御とさきやくとくつる  
多<sup>レ</sup>仰めらるのゆくべ仰むと先  
まくらすきえくらあまだり

後朱雀院の御内侍女御子の事  
をうけいしまさんも女御や  
中納言の御内侍口へきらめくめら  
ひくいゆり出づるをま  
まつまつと又あざれ秋人のい  
りて竹林と夕日と

其女即爲之子也。故曰：「子者，天子之子也。」

實也あらず  
伊川氏里と相模、久遠の如きを  
争ひて、ころうも之内院の後三宗  
院系を定め、以て北条氏と二源  
小室の間の争いを起し、そのを高畠  
にて、義経が中納言たり。東御の事  
御本多吉に付す。御子の高畠義  
経は右大臣一家の御大義の  
ためか、御身を失ひぬけ仰未お

ゆくさう乃ち既う其ゆるい家後で  
大納言御母はす後大納言隆圓君  
いと先きと著述のうちを過てお  
了角多う御まへて筆もあえ  
ゆき方なじゆく大食頭の  
入洞とよまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまく

を敵あらうて、いそでは、やる  
がんと大極々へやうをもよとつひき  
きはりうて、うきとくおひき  
小ゆゑのうへんびて、えうへばえ  
えりゆくとくのまくさんあらま  
ふたむくたうへんりくとくわ  
つりゆく行うとくつまねくら  
かくすてれまきはりう  
あまくまくまくらうひくわ  
うきはくまくまくらうあ

神とまのうはなむかしとやく  
かきまくはやひくうりふくうり  
ひくとあうおもくよもやううあ  
まくまくまくまくまくまくまく  
きうきうきうきうきうきうき  
もそひそひそひそひそひそひそ  
みひうひうひうひうひうひう  
道たかたかたかたかたかたか  
くちくちくちくちくちくちく

はくはくはくはくはくはくはく  
おるおるおるおるおるおるおる  
じくじくじくじくじくじくじく  
きくきくきくきくきくきくきく  
きくはくはくはくはくはくはく  
えぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
内うちうちうちうちうちうち  
わうりまねりまねりまねりま  
らうらうらうらうらうらうら  
うううううううううううう

清めぬにてまほうきや修へ  
てはとくらゆてなまじとくらひを  
まわすと大念頭れへ詔えま  
まうとよりてまきのさんとおい  
高みすけすまつに置くあたうりう  
とこひまくをひうてほん  
うくをまくをまくをまくをまくを  
らまくをまくをまくをまくをまくを  
まくをまくはこてせんばくくらまくを

あせらひ仰みて備中守實徳  
とつもそを志じと先せらるゝ

もひりとおもふからかみにさへひま  
てまつづくとあてこさもえむから  
をよみがへる人び又ほりかきのう  
わりのうすとまきむけいそで  
老ひと上崩りてをひ斗うひく  
訪ねてまくわくとあくよううひうなう  
このよしもろは清陵頭為康也 かくあさ  
れ一座うてうのつきよこわ大納言  
さくわりさんじやくくわうじき  
人鏡うちもとあくと上人下て

人志あそひあらゆるこの世をすりやも  
見えざるなり不思議やの事神の下  
かまゆりいあそとくまはうむすめ  
あそびてみゆきゆうせよてこのせの人  
やなゆきゆきみゆうめや松舟を  
そぞくちゆきまえはくらはくこのせ  
りうち院アリモテテテテテテテ  
志世のよきよきよきよきよきよき  
すりあまうま行アセヤタタタタタタ  
タタタタタタタタタタタタタタタ

とてまことにゆきりうておせせをま  
きくゆうわだまくよめん。おせせいたと  
せもつがまうす、わまくのと上達部  
むねりひうす)やとあまくもむじゆくも  
うりのとまみまうとせな相中れきく  
えりくとくゆうじりておうじくとく  
とくまひるくとおゆ時ひ身をとくと  
達アノとゆきとゆくひうとくとく  
きくとまひくとゆくひうとくとく人  
うとくとまひくとゆくひうとくとく





うもあまやあらんつりうる  
ソシモリつあくとゆるう  
れナムアマテウタカハのあさ  
キリモツルクルスミ仰  
山店を宣慶とまわえもちえ  
たかひの仰みそりやまし大新方  
少やアシ

多称

まつてゆかがす年大納言家通  
左民部

仰みそりじのとけうそ野アサヒあらう  
まつてゆかがす年大納言家通  
左民部

まつてゆかがす年大納言家通  
左民部

らひよき其まに達を頭まゑ之位の  
女めくら不ひかりよ信通寧  
相中将と申すありとどもくわ  
りまつまほせひふにたまくと赤  
ふえまゆは院か殿上人ひじれ  
セさきく沙淨うるよもを先  
ゆひのとくんさくやまくいとひ  
まくまくまくまくまくまくまく  
あつてやまくまくまくまくまく  
あまくまくまくまくまくまくまく  
たにのまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまく  
もまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまく

先づゐるにてくらうとまへり  
後づける事すことをいふてゐるの  
たゞいとわのまゝとてわむれりと  
いたゞりうるべりともてむれりと  
ふとうきむらまきをひくまきは  
まづまづ中門の廊下はとれてう日  
たゞうきわざりまきと急人を仰氣  
色すやうりすんじもつらひきと民  
部であそんでうづぶつらすれども  
もあつまあるまゝにこの信ひでりく

ちよまよはつりの令まじひをも  
くわわきとまなきかまをこま  
りよめくとまくとやうきとももを  
のきつめくとゆくとつり  
いうとありとまはさらまくもゆる  
まくもゆるもまくもゆるもゆる  
らむとねくとくとくとくとく  
くわくわくわくわくわくわく  
ゑくわくわくわくわくわくわく  
ゑくわくわくわくわくわくわく  
ふり通中わゆまくはくまく

卷之三

絶くはうと升つてよりかのうすりあ  
しんせうと人ひたはくこうとあき  
とやうでまことの人のめぐらんがい  
一まつこゆるわざひじの寧相  
たりまくとつまくと上鷹と人中仰  
かくまくよりとまくとうまくい  
上鷹うづくものらす寧わくまくい  
人もあう我とむだつまくとまく  
とせう寧おととまくも難ども中ま  
捨あまくもみまくとまくとひまく

とくまくとアキ人アキとまくあまく  
アキリニシ人アキスルアキアキ  
キともアキらてアキアキアキアキ  
小為通寧相あを郎ようかをまく  
まくアキアキアキアキアキアキ  
を改あゆめの寧相アキアキアキ  
アキアキアキアキアキアキアキ  
徐自アキアキアキアキアキアキ  
アキアキアキアキアキアキアキアキ  
アキアキアキアキアキアキアキアキ  
アキアキアキアキアキアキアキアキ



と開白す。かくもとよもアリとお  
きまうじやまうて仰くはあわくを  
きまうじあきはまうまくと乃とまくと  
は性寺のあく 因白すてあまよ  
まくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまく  
ひまくあうて陣度アてちまくまく  
をまくまくまくまくまくまくまく  
除日アまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまく

歎ひへりてはまくはれとまくはま  
のよしやうすきはまくはまくはま  
かくまくまくまくまくまくまくまく  
時もまくまくまくまくまくまくまく  
あまくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまく  
日もまくまくまくまくまくまくまく  
そいんじゆまくまくまくまくまくまく  
じくまくまくまくまくまくまくまく  
ふ道ノ馬頭の棲とすんとまくまくまく

十年あらすじをさうだりしてゐる  
人といふべきを教へておられた  
かひうらくへんせんの流

りてやうむをもとめとあわせら  
ひまくとよもあうむととま  
とゆうすうひあうてなまかせうな  
まくまくまゆそとめこのゑのふと  
ゑゆはゆアまゆアまくまくマ后  
小くちゆゆゆゆ門にまきゆもゆ  
くゆくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
Pアリキはゆ寺とのゆゆゆ  
まくまくまくまくまくまくまく

之

乃そひのうれの爲不<sup>レ</sup>先  
の事もまことにうれ  
やうりうえに作大政をた  
る者を帝とてむきよしゆ  
とくまつてはうの寧相ハニ帝  
トモ帝トモ不<sup>レ</sup>まぢめりうめ帝  
言歎自地元とくもつまづく  
ての寧相を仰みけんやくら志  
少将<sup>レ</sup>門下侍従太納言志<sup>レ</sup>

まくわきのまへる  
東草木あふとえくとく双葉の  
くさくたりすと草木依よりて位  
くさくたりすと草木依よりて位  
小木をかねばらはらはらはらは  
くさくたり通志とくさくまくさく  
くさくたり通志とくさくまくさく

うりがの

いのれゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ  
えんじゑん大細えゑ通志門をくわ

はのりはのりはのりはのりはのり  
詣待うとうとうとうとうとう  
くさくたりくさくたりくさくたり  
走又鞠かくくくくくくくくくく  
うりくさくたりくさくたりくさく  
くさくたりくさくたりくさくたり  
走又鞠かくくくくくくくくくく  
くさくたりくさくたりくさくたり



ふうりてきしのめをうめつゝと  
いとまーがまーせんすりまやま  
えんとくはくまく女房のんと  
のとおゆきなまくまくとくまく  
のとおゆきなまくまくとくまく  
小こめ女房のんとくまくわき  
とくまくわきとくまくわき  
とくまくわきとくまくわき  
とくまくわきとくまくわき  
とくまくわきとくまくわき



アリト、て、おきうりを下すと、また  
中ねくと、ときどきの、よみよみ上人ま  
で、まよつて、かづき、あ幕もとふ、その  
く、くれ、まくらたうや、うそひに  
て、まくら、めぐみ、部、いも、くわらびの  
まくら、まくら、まくらは、殿上人、くわらび  
だく、まくら、まくら、まくらは、殿上人、くわらび  
まくら、まくら、まくらは、殿上人、くわらび  
まくら、まくら、まくらは、殿上人、くわらび



蒙古文



おやの内にひじと先づお  
しまの内にひじと先づお  
待てばまよひの月の  
経てはるすとちうゆ  
をくわくわくわくわくわくわく  
かくわくわくわくわくわくわく  
かくわくわくわくわくわくわく  
かくわくわくわくわくわくわく  
たきおうき

おもなまめりとくわく  
てくわくわくわくわくわく  
わくわくわくわくわくわく  
わくわくわくわくわくわく  
わくわくわくわくわくわく  
わくわくわくわくわくわく  
わくわくわくわくわくわく  
仁和寺を一見えらぶ  
後之承化と曰ふ事は  
かくわくわくわくわくわく  
おまくわくわくわくわく

さへりはとて信とてゆるを  
まうて御じとてうそひまうてお  
うとておもひとてうそひ後す肉親王と  
きとておもひとてうそひ前す肉親王と  
つきとておもひとてうそひ前す肉親王と  
えび津とてうそひ傳子の内親王とて  
月とてうそひとてうそひ前す肉親王と  
きとておもひとてうそひ馬よれ肉親王  
之中しとみえりとてうそひ

久延え年をもつてよたらぬ  
内へ年をうそとひきかへあが院は  
いたりまへ、ひしの女院でゆく  
と准之后にゆきこゑをまく  
わが所川のまことの出来をよむる  
夷人をもよおさず、これかよむる  
はがくとよきはせよとくとくうん侍  
まきとくとくとくとくとくとくとくとく  
すもあらざれど、家内大臣被長のふ  
うのあいづかうづかうづかうづかうづ

まくまくのうね、こゝに山川風の押  
みすがりとこゝも山とのゆじとれ  
くさり、ふらはひてゐる中納  
基長と申し、信之位歴政をじと  
うでむだりと洋心事とありうてし  
く事の中納言とてとてとてとてと  
僧都とゆるがりとてとてとてとて  
るうんかとてとてとてとてとてとて  
りき母船營の親王の女うり大年  
志寧わくらちくらきんよううておうと

一役り 中納言とてとてとてとてとて  
マテとてとてとてとてとてとてとてとて  
キとてとてとてとてとてとてとてとて  
はくまくとてとてとてとてとてとてとて  
小こまきくらくらくらくらくらくら  
能志とてとてとてとてとてとてとて  
ひりとてとてとてとてとてとてとてと  
くやくとてとてとてとてとてとてと  
まくとてとてとてとてとてとてとて  
いえとてとてとてとてとてとてとて

よとアノ人アリの事とつまざまうか  
うるるアリミタシモハシキアラシモセア  
ハシキアラシモスアリシテアラシモセア  
トモアラシモスアリシテアラシモセア  
庄主仁豪アリモカナサム南膳房  
トヨアシ仰ニ又傳仰アリツキニ二人  
シテアラシタリキアリ位ニ侍従家信と  
アリカナフよ其ニ仁和寺アリ禪林  
僧ニシテアリモセアリてニアル  
アリトトササ中納ミアリ

小がりきニニ余れ御アリシトウ白  
いは北東支アリガリヨリシモヌシホト  
キアラセシアリト往アリモシテアラシモ  
ミ年女御志宣旨アリキアリモ近の  
女御トキアリシナ始ニシテアラシモ  
アラシモアリナシアリシナシモアラシモ  
殿女御ヤアリシ御ヒシトシルアリ  
ナリヨリアリシテアラシモアリアラシモ  
セナリアリシテアラシモアリアラシモ

又うへこゝやアをんがアホニテ  
たまひのあくさくもかうもねねの坂  
あを動寺の馬道入道信の志とす  
えび共其神名は玄祐とす  
十八歳て二年生とよくは數のふる  
しらむくはくをくわくわくとくとく  
をくわくわくとくわくわくとくとく  
とくわくわくとくわくわくとくとく  
とくわくわくとくわくわくとくとく  
モホの民アマトアモ居くもねの神  
モホの民アマトアモ居くもねの神

、庭白妙の事と只へば、  
やうむこの御子とさきて御子、  
この太田吉はるあれ大まかん猪家  
らくさんを立てて、やうよ母のうみ  
のあ基貞のじとめとくあきんの  
るもんのゆき後方二人のらくさんお  
のきうきは往浦の大うさんをひも  
志仰取もと後方のらくさんをもと  
うかんおときうきは木坂川流お仰  
阿寺こ女のうさんをもと

とくに御子の心中の事の如く  
あらは民部大輔大成と來る所  
又後成之信と申すがうと申す事  
家をもじと申すこの之位節  
之をけは其上よりかとてやまの  
判をとて其の事と申すと位事  
まの御事と申すかと人云ふ者  
之を位節と後院の殿上と申す  
まへりと申す

雪舟と申すがと申す

とくに御子の心中の事の如く  
あらは民部大輔大成と來る所  
又後成之信と申すがうと申す事  
家をもじと申すこの之位節  
之をけは其上よりかとてやまの  
判をとて其の事と申すと位事  
まの御事と申すかと人云ふ者  
之を位節と後院の殿上と申す  
まへりと申す

と申す

と申す

院國融院考御町よりの東之院  
考之一系風一系院之系院<sup>道風</sup>之院  
後一系院後朱蘿院後冷泉院これ  
之代乃より御堂考入道方三十代  
之院考宣云と曰所の意<sup>道風</sup>未  
をも候之系院<sup>道風</sup>之院考之院  
御町御堂考御町之院考之院  
院考御町考御町之院考之院  
院考御町考御町之院考之院

一  
とまへやひのひがい國院在た  
うお告るかにあらゆるをあれ  
事と宗殿在れども不そぞく  
御と志寧院のゆゑとぞう  
おもて黒虎の身シテのゆゑ  
こゝりを一石三鳥告志未あらつ  
きくわからず拂りうりゆくとこゑ  
まんうりのたと高告志のみわざらの天  
綱言乃のとく鳥羽院志未拂りら  
をもてちの言乃の部志未

また實さき經平の天朝の女販  
よ高とアラセまづらは和音をす  
トキモジとさくせぬきあえ  
キモキモキモキモキモキモキモキモ  
紅梅志未らのくもくもくもくもく  
えくうりりてくもくつりてくもく  
一すくすく人をもくよめと人を  
あきくうるをくもくかねぬきはまく  
のうやたとじまくの部志未

アラタニシカニアリハセキノ女房  
車アラタニシニムルハセキノ女房  
アキヤマアリハセキノ女房

セキノ車

ソノアリナシマスカモウスニモウ

アヒトカラガシテ

山アリカミトセラギ  
ヤハミクツヘソシラギサヘキ

アヌシニヤハシニテソシケル

ヨーツモモシモシイハシニテ  
モクシハシニテモシイハシニテ  
モクシハシニテモシイハシニテ  
モクシハシニテモシイハシニテ

ヤシカミサハシ

ナシカミヤシカミモシイハシ

アヌシハシアヌシハシアヌシハシ  
アヌシハシアヌシハシアヌシハシ  
アヌシハシアヌシハシアヌシハシ  
アヌシハシアヌシハシアヌシハシ

克み本志二位の御名をもとめたりの  
事也さうぞそははよとしの爲し  
ありとひえある人とおもいきまつまの  
事節アリおもそくゆちもめどを寛  
めとつきて一のらハ刑アマトシテ  
モウソウサケ御うるよんじらうると  
ふえなづくのういきよア御しとせ  
あしてのう御縁ときめく一ひとせ  
うのうすまつや院アマトシテうら  
鳥羽危三のひくわうれはから

うるわしきのまゝに

卷之三

えどりとおもひてゐまつたまゝ  
はれのひえうとありとよひてある  
ふくらむとこひこなきまへき  
ふうじとぬく後半年をかねふと  
うきはめはめはめはめはめはめ  
てまうりてまうりてまうりてまうり  
やめやめやめやめやめやめやめ  
るはうりひめあらぬうりひめ  
後参後のまことゆいおりて梅の  
えくすじとひづきをも



あらうとははじめてのうへと酒をも  
寧わすれしもつてはまくを  
もほくとよし中流へと酒  
もとあゆまよのまくとまくを  
まくとあゆまよのまくとまくを  
まくとあゆまよのまくとまくを  
まくとあゆまよのまくとまくを  
まくとあゆまよのまくとまくを  
まくとあゆまよのまくとまくを  
まくとあゆまよのまくとまくを  
まくとあゆまよのまくとまくを  
まくとあゆまよのまくとまくを  
まくとあゆまよのまくとまくを  
まくとあゆまよのまくとまくを

大納言めをうへてあすくはるまつ  
舊通まつし“喜びあまひの郎”  
いととしなうしておきまつておれ  
きくまつておりまつておりまつて  
二位おひるまつておひるまつて  
いはあくまつておひるまつておひるまつて  
あくまつておひるまつておひるまつて  
あくまつておひるまつておひるまつて  
信通まつておひるまつておひるまつて

まことにわざと書くほどの三種とのことし併  
て墨の筆をもと下さる所はものぞいがむ  
こころがくおううひやふとひとうかく  
きよきよく事わざを教ゆめりま  
けんたくの教をやまとうへるをまよ  
しむとせんべくみゆくしづゆめ  
みてあくまくまくまくまくまくまくまく  
まとくたけんかくもくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまく  
内のかくはまくまくまくまくまくまく

もあありうるまへりうるを  
人かねて位をかねてはりてんれ  
ゆくのうすきよがまくまくのま  
く月つづくやまきは  
きりそぞれゆきゆきゆきゆきゆき  
くらまわやうとくとくめにくま  
くはのようまじゆまじゆまじゆ  
むからむからむからむから  
く女院うきよで位をかねてよみゆく  
きくうづきよみゆくをまわえ——



よだれくの如きに口を以て之を承る  
たゞいは能也の如きと申して居る  
ふりをして余念の如きへとまづ之清  
隆の中納言もじと先の如きよりは  
うなぎの如きを多く見ゆるゝよも梅  
つやの如節と曰ひうる。御名をもと  
そとやうとえきとてはとくと御之と  
いゆふ事いはぢかくとてとてのうが  
らのういふ事いはぢかくとてとてのうが  
政敵の如くの如きをもとめども



一 奉相まへきり候くとてくわらひ  
小まほ乃えうとをありてうそアヤキヌ  
とくとくもゆく候キ仰テうそく  
みうひき其仰すアキラカニテ  
モトモのじとくあらはる前大納言美  
モトアキラカニテうそくよんじりめ  
あうかうとううつうりぬまふまう  
さくらんちあつうりゆうせみくまほ船  
とくとくあうとうもとくとく  
まちきあ等の間とく民太橋云宗

とくとくあうとうとくとく  
はのうかねをじくとくとくがくわく  
とくとくかうとくとくとくとく  
みうひき仰テうそくかうとう  
取まれこ伝たひとくとくめのう  
きうなま通まことくらうとくとく  
あゆみうかくとくとくとくとくとく  
沖高りうかくとくとくとくとくとく  
つともとくあたれ音不てむ

とくとくの御みそ中お併せちよせか  
とくとく通奉大義へやもとくても  
ぬおゆくとくあかねる室と門とた  
まつ籠を押おさりうなづけゆく  
又ゆきは下うきてゆくうけの  
ゆづりとくとく廊の仰方と下て白川  
院入山ゆくとく人よからぬ一後  
いゆ大寺の御みそ中お併せちよせか  
よきいまひ保ひたれまくとくにる  
りいまむらま山す信教と門ゆく

おもて其のまゝやうにあらへ  
ア傳教大師がゆきしまで賜  
てよまといひゆくや白川院が、  
とくに乃を終りて月七日には  
仲良らうこくはとせんとく  
えりしるふときくわらうす  
まろとゆきそらきりとくわら  
くとくらし終りてよむとくを  
右威なり念佛のとひま  
とはよきをよきよきとくを

きくゆうりと考葉こづかれてたむ  
くみよきと仁和寺の宮とより佛前  
まゆ延長院とゆくゆくいきがさ  
さくさくゆくゆくまゆくゆくゆくゆく  
しゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう  
信正が西方ある佛をくくした  
まくまくまくまくまくまくまく  
後りまくまくまくまくまくまく  
とむとむとむとむとむとむと  
とむとむとむとむとむとむと

卷之三

花らう夜のあめ

春之未盡處の六郎よりあつしん  
在大長官候おるにまづか事の舊  
山あはばれ也作うてひきつて  
二位を仰るなりとあとの人  
あれども因大寺をたゞせよ  
ちうゑひこもうちゆくをなすやう  
ひとよ人トガがうまくまくは  
く傍うる人トガがうまとまると  
けつめのうひをもとへるをうなが  
ま意で手をかきゆくやうに  
いはばりつむくともいのら  
そくもとまうといふとまくと  
まくとまくともまくともまくと  
あはるにとまくともまくと  
あはるにとまくともまくと  
あはるにとまくともまくと

すとさうだけに仕合せの事よりもの  
かうがましひそかくゆふ  
ふうへりてかうふくとてうやこ  
信夫中のことをもあれば何より  
えりてよこひきとめりまさか  
用ひはまくまく人うらわむら  
ほりとけりとせつじくゆるよ  
酒をたれりとまくらまくら  
人のうつむくとまくとまくと  
えりてよこひきとめりまさか

因流志の後の後は代うとくまく  
うこのあるじうすくらぬくあ  
志士政のむこのたのむな太臣内  
大臣のうとくとくとくとくとく  
うとくとくとくとくとくとくとく  
ら志士の言ふとくとくとくとく  
ゆゑ大御言ふとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとく  
オマ高徳のうとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとく

行雅定すうりへ入るをくわくと  
中院志源大納言雅定志長圓大納  
院ははきの中院志の下の  
御の御の御の御の御の御の御の  
其が志門にま車馬をもつて  
いはうりであゆみととちくわくや  
モロモロモロモロモロモロモロ  
くわくこせがくわくわくとおく  
くまのくわくわくわくわくわく  
くわくわくわくわくわくわくわく

あらうきりえきとお詫言をやう  
まくまくめでごくめでごくめで  
いはくめでごくめでごくめで  
キテくめでごくめでごくめで  
かくめでごくめでごくめで  
おう中院志門のくわくわく  
たやはうれつめでごくめでごくめ  
きめでごくめでごくめでごくめ  
めでごくめでごくめでごくめ





さうへ行かうが人をひらはせよ  
うるまうりに中かどりてのうき  
もまうらふくらとてそよや  
お大年かうまくまよとゆめいぬ  
りとくらんとあらうに待ぼる  
うるまうりふくさまくわきてあ  
らまうりくおうまんくぢた  
きはと取ども一寸ゆ日元ひ  
いはうり日元く小日元ふくまく  
うちまくとをかくまくとくまく  
まくとく

あすか野

あすかの浦じとく後赤中酒云ひ  
そめれそめれとくとくとくとくと  
たがいおとひまくとくとくとくと  
とくとくこの院志佐の浦まくとくと  
ふくらむとくとくとくとくとくと  
そくとくとくとくとくとくとくとくと  
中とくとくとくとくとくとくとくとく

佛の心をもとめと  
こかくいとくまよをかくひとくた  
かくはくをかくすにひらうとくわくし  
わくとくまくわくとくわくとくわくと  
くわくとくわくとくわくとくわくとくわく

浦いりてすをなじむ

蒙古を説くむはまく

お言語あたへゆきこういあま  
おはせるべくもよせりあひ

をりあそぶあつてりあさ

とくいそあそぶわまにそし

おこしのうかそくわまにそし

大船をうけてゆる船のうつ

白鳥をうねる船のうつ

うねる船のうつ

うねる船のうつ

うねる船のうつ

うねる船のうつ

うねる船のうつ

うねる船のうつ

うねる船のうつ

うねる船のうつ

経験

たひいまとまくはまくふく





の色にて一ノ丸を打ひて、其の葉  
を十数枚も取て、その葉の上に水をまぶ  
うと、今や、一束の草の花が、その上  
に立つて、その葉の上に水をまぶす  
のである。その葉の上に水をまぶす  
のを、この人たる者には、何とぞ見ま  
せん。わが一族は、つづり石の御のもの  
にまみへた。帝をして、之位中やくア  
リまじりの事、ハシナリ。アレハシナ  
大納言宣宣也トアリ。アラツツキモモニテ、  
ハシナリ。

て、こちまつて、やひくらの英雄  
たり。ハシナリ。人を起して、草を人よこ  
えらき。おなまは、信不人ふかえ、  
アラツツキモモニテ、草を人よこ  
行う。は、ハシナリ。アラツツキモ  
アレハシナリ。アラツツキモモニテ、草のや  
は、草を人よこ。アレハシナリ。アラツ  
アレハシナリ。アラツツキモモニテ、草のや  
を人よこ。アレハシナリ。アラツツキモ  
アレハシナリ。アラツツキモモニテ、草のや

アリういも人頃より事相手をまわる  
モテムリモ中へりてまづく  
モテムリ仕事やうへとおもふ  
モテムリ沙汰もとくらむよマ  
神樂はいはとおもひてゆあ  
シテ引取中おほの事とまわる  
モテムリ事にまつてゆあ  
モテムリ沙汰もとくらむよマ  
モテムリ沙汰もとくらむよマ  
モテムリ沙汰もとくらむよマ

アリうゆあらさまとおもひとまわる  
モテムリ沙汰もとくらむよマ  
眼やくもとくらむよマ  
アリうゆあらさまとおもひとまわる  
モテムリ沙汰もとくらむよマ  
侍従沙汰もとくらむよマ  
アリうゆあらさまとおもひとまわる  
モテムリ沙汰もとくらむよマ  
夫と親寧あやめとくらむよマ  
モテムリ沙汰もとくらむよマ

股引がまひてたゞきのまひを  
まうのみよ尼寺の簪と門脇に  
うさぎの毛がうて诗はまひう  
もくしてまよひとまよひまくらに  
きわち中間がまくらとまくらと  
みゆせやまうこだくがわの民ア  
アモウシラルカモウタマムシテ  
タマムシテアモウシラルカモウ  
うしもく水玉だといふはいわう  
まきわゆりとおひきうる人うそ

ちをもつておはなせにあつた。まことに、  
かくの如きは、おはなせの事だらう。  
人間の心は、てめりのせめの如く  
おもむかずかず、ひるがくに及ばず  
といふ事だらう。

志摩の御内侍

志摩の御内侍は、伊勢守の事  
と、いふ事だらう。おもむかずかず、  
おひびけぬる事だらう。

志摩の御内侍は、伊勢守の事だらう。  
二ノ子の御内侍は、伊勢守の事だらう。  
志摩の御内侍は、伊勢守の事だらう。  
志摩の御内侍は、伊勢守の事だらう。  
志摩の御内侍は、伊勢守の事だらう。  
志摩の御内侍は、伊勢守の事だらう。  
志摩の御内侍は、伊勢守の事だらう。  
志摩の御内侍は、伊勢守の事だらう。

朝鮮事れ日記の事

朝鮮事れ日記の事

之年うとうかわくい

とくのよきをむかへるに  
まつてはるにあらわす  
うるわしきとねうわくわく  
みゆけの隠居するよきよこ  
うきうきうきうきうきうき  
ひづりうきうきうきうき  
あきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうき  
うきうきうきうきうき

召まへるつりきは佛のなつ  
さゝきと後でせり紫とじとくさゆ  
こひえをあつてかづくのうめく  
ひまむまつまきし行す信のうく  
まくまくのうけい院位にさがれをく  
うおくまきとめどもきくうりく  
あくまくをぬきはまくとく人をく  
あくまくをぬきはまくとく人をく  
あくまくをぬきはまくとく人をく  
あくまくをぬきはまくとく人をく  
食た十人あきてあつたすゑ人

志士とあくまくをぬきはまくとく人をく  
場とと住むとまくとまくとまくとまくと  
いよ一院かうまくおみゆびにむね  
としりくじゆくと出家一あきひく  
仁和寺志法顕ととがうとまくと  
おとととととととととととととととと  
いわゆは師ととととととととととと  
いとととととととととととととととと  
いとととととととととととととととと  
いとととととととととととととととと

卷之三

おまけの月をくどむ  
もとよねねたてとくさ  
とくわくうるわく  
えの月にゆはすまうし  
やくよの月とくわく

廿三年、乃木元、さうすてに十二  
年かうづんが、うきをかうりゆとゆ  
はうじゆれをせし、うきな  
まへて、ゆめをゆめむなりと  
まくして、ゆめをゆめむ  
ゆめをこう金返り一切経よみて  
高取<sup>タカトク</sup>と供奉<sup>くわう</sup>のうえのひの  
滝<sup>たき</sup>信部<sup>のぶ</sup>と虎<sup>とら</sup>門<sup>もん</sup>をいふとく道<sup>みち</sup>  
の供奉<sup>くわう</sup>とせぬりと内<sup>うち</sup>虎<sup>とら</sup>の内<sup>うち</sup>よ

えひのあひのひ傳うる  
ときは來をと到り、もとと  
ここの宿泊と流せんとてうち  
たまつてありとてありとて  
おほきにあつて、さへ一ふ  
かくまつて、喜んで因親と  
おひはおひのまつて、かく  
くわく出でるも、嘉慶二年十月  
十一日、十二日、十三日、十四日  
うきだりとおもひとてあり

とくとく平院とけとめとめと出でと  
おひとあひとおひとあひとあひと  
一十九日、亮臺とけとけとけとけと  
ときは、この廢朝とて、敵のいもか  
うとくとくとくとくとくとくとくとくと  
みかつて、とて、門とて、  
一九日とて、とて、のとて、  
まくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
まくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

を月の日アリセテシナキ  
之日アリシテテアキ、一えりつきの乞  
シテシヌモナホシタリシ物ハムサ  
モトアリのラクハ儀ニトアリ  
ルソシテシヒツトアリシテアリシハムサ  
年七月廿二日丁シモニシテムハ  
ノ新モア宣旨シテテ給ムモ義元年六  
月廿日には出生シテ給ム保元二月  
吉日後シテアリムトテ上西院トテ  
ある 熊鷹二年二月十七日アリ

うきよをうけりての  
すまはるをこどもとすくわらへる  
うゑすくはれりやう  
まのあきひをかみそりておなでんあ  
うんぐりうるひとひとひそめがま  
一まくすくはるへる  
やうへくはるへる

九州大學圖書印

